

(様式2)

令和 3 年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1590600050		
法人名	社会福祉法人 御幸会		
事業所名	グループホーム・ヒルトップくしがた(すずらんユニット)		
所在地	新潟県新発田市中央町4丁目6番6号		
自己評価作成日	令和 4年1月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/15/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人新潟県社会福祉士会 外部評価機関「あいエイド新潟」		
所在地	新潟県新潟市中央区上所2丁目2番2号 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	令和 4年3月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍により多くの活動に制約を受けることとなった。そのなかでも、ご家族との面会や外出といった一番の楽しみや気分転換となる機会が確保できないことがストレスに繋がるものと考えた。これまでのご利用者支援を振り返り、施設内で可能な全員が喜び、参加出来ることを職員で話し合った結果、調理レクが最適であるに至った。調理レクはこれまでも毎年実施してきたことであるが、今年度はより回数を増やすことを実践した。皮をむく、切る、盛り付ける、調理するといった作業は全てのご利用者が経験してきたことであり、その場面場面では笑いやお互いが協力する様子が伺えた。また、自分たちで作ったものをおいしそうに召し上がられる姿は職員にとっても喜びとなった。今後も施設運営に於いて制約があるなかでご利用者の喜びとなるような作業を提供できるように頑張っていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、開設時のスタッフで作り上げた理念(居心地の良い環境づくり)を大切にして、実践をしている。利用者一人ひとりの特徴をふまえて、役割をもった生活を送れるよう支援している。特に食事の場面では、野菜の皮むき、炒め物、配膳、後片付けなど利用者が主体的に取り組んでいた。その他にも、習字の先生だった方が他の利用者に書道を教えていたり、計算が得意な方が脳トレーニングの教材に取り組んだり、個々の生活スタイルに合わせた暮らしを送っている。

ユニット会議では利用者の支援方法について話し合いが行われている。個別担当職員が毎月ごとに交代する体制をとっており、より多くの職員が目で見られる生活や思いが把握され、会議において数多くの意見が出されている。管理者は、出された意見を可能な限り取り入れている。また、職員同士がなんでも言い合える関係がつけられており、悩みをお互いに相談したり、不適切ケアについて職員同士で気づいて改善につなげている。

日常的な外出機会も多く、天気の良い日はほぼ毎日散歩に出かけている。事業所の周りのお墓や地域の商店などいくつかの散歩コースがあり、そこで地域の方と挨拶を交わしたり、お花をいただいたりと交流がされている。また、毎月ドライブも行っていて植物園などに出かけている。コロナ禍ではあるが、外出したい利用者の希望に応え、そこで季節の移ろいを感じたり気分転換が図られている。

手作りにこだわったおいしい食事や、共用空間で利用者同士が談笑している姿などから、理念に掲げた「居心地の良い環境」がつけられていることを感じられる事業所である。

自己評価および外部評価結果【すずらんユニット】

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度初めの全体会議の場で施設理念について話し合いを行った。施設開設から10年が経過したが当初の理念に基づいて施設づくりと利用者支援を実践してきたので、理念は変更せずこのまま継続すべきとの考えに至った。	開設時に立案した「笑いの絶えない家庭づくり」という理念が、事業所全体に息づいている。毎年、年度始めには理念を紐解き、改めて考える機会を持っている。ケアに行きづまった時などには理念に立ち返ることで方向性を見出している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により、これまで築き上げた地域との繋がりや交流は休止せざる得なかった。	コロナ禍により地域の行事やイベントは全て中止となっているため交流は難しい状況である。地域とのつながりは深く、コロナ禍以前は、春には消防団の放水訓練、秋には紅葉ウォーク、年度末の自治会館の大掃除などに参加していた。地域の回覧板で事業所の広報誌を回覧していただき事業所の行事などのお知らせをし参加を募っていた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年であれば中学生の総合学習の受け入れや行事を通じて認知症の方々の理解や支援のあり方を発信する機会が保たれていたが、現状は広報誌を地域に回覧することで対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現状、会議は開催出来ていない。活動状況を書面にまとめ管理者が会議構成員の自宅を訪問して報告と意見を頂戴している。頂戴する意見はコロナウイルス感染防止が焦点となっている。	コロナ禍により参集せず書面での開催が続いているが、管理者が直接、委員を訪問し意見を聴取している。全家族に会議への参加をお願いし、都合が合った時は参加してもらっている。事業所開設以降、ほぼ参加メンバーが変わらず、忌憚のない意見をいただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	ここ最近では行政担当者との連絡、連携はあまりないが、困りごとがあれば相談させていただいている。長年に渡っていただいたアドバイスが施設運営に活かされている。	市の担当者とは顔の見える関係であり、事業所の運営に関することなども気軽に質問し助言を受けている。日常的なやり取りはメールや電話が多い。過去に市からの紹介により、困難ケースや生活保護の対象者の受け入れを行なった実績がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎年、身体拘束廃止に向けた研修を行うなかで全職員が指定基準における禁止行為は理解できている。四半期ごとに開催する廃止委員会では指定基準にとどまらず、些細な行為にも焦点をあてて話し合っている。	マニュアルを整備するとともに、計画的な研修の実施により職員の意識の向上に努めている。日中、玄関口は自由に入出りが出来るため利用者が外に出てしまうこともあるが、施錠に頼らず様々な角度から検証し事故にならないよう対応している。センサーマットの使用についても研修を実施するなど身体拘束を行わないケアに努めている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止研修は毎年実施している。法令に関わる研修や介護支援のあり方など研修内容は毎年変わるが、全職員が知見を深められるように取り組んでいる。日常の介護支援の場面では、「おやっ？」と思うような対応は職員間で注意喚起ができる環境づくりに努めている。	マニュアルを整備するとともに、計画的に研修を実施している。ケアの現場で起きるトラブルをヒヤリハット、ニアミス、事故の3段階に分類しそれぞれに報告書を記載し検証するとともに、再発防止策を検討している。そのような取り組みにより、間接的に虐待の起きにくい職場環境を作りだしている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	毎年権利擁護に関わる研修を実施している。成年後見制度と日常生活自立支援制事業においても何度か学ぶ機会は設けられている。また、ご利用者において成年後見制度の活用に至るケースがあったが、その際は家裁提出書類等において協力させていただいた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、解約時においては十分な時間を取って説明を行っている。また、これまでにあった不安点や疑問点をあらかじめ説明することで安心へと繋げている。料金の改定においても重要事項説明書の一部変更に伴う契約書に基づいて説明と承諾を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会が困難となっている環境のなかで、ご家族の意見や要望を抽出する機会はサービス担当者会議の場が主たるものとなる。抽出された意見や要望は要点がまとめられて全職員に周知されることになる。必要がある際は介護サービスの検討や施設運営の改善などに活用されている。	利用者も職員もグループホームに長くいる人が多く、何でも言い合える関係が出来ている。家族からは面会時のほか、原則6ヶ月に1回はサービス担当者会議で来訪してもらっており、意見要望を聴取する貴重な場となっている。家族から頂いた職員に対する労いの手紙は回覧し、職員の励みとなっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	かしまって意見を訊く機会は設けていないが、介護支援の場面々々やその時々で意見や要望は上がってくる。個別で対応する内容や共有すべき内容なのか判断した上で運営に反映させている。	職員からの意見や要望は管理者が聴き取り、必要があれば法人の管理者会議で上層部へ上申している。日常的な気づきや提案は申し送りノートに何でも記載し共有するとともに、全体での話し合いを行なっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は勤怠実績や職位、経験、努力等に基づいて給与水準や昇給を決定している。就業における実情は時間外での労働はほぼ無く、定刻通りに出勤できている。また、有給休暇も良好に取得出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修の実施が研鑽の機会となっている。全職員が参加出来るわけではないが議事録を回覧することで対応している。オンライン研修の案内も増えてきているので参加できるように体制を見直していく。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍につき不要な接触は自粛としている。		
Ⅱ 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期面接の段階で入所に際しての要望や困りごとの聞き取りを行っている。汲み取った要望や困りごとは施設に持ち帰り、職員間で最善を講じている。また、ご家族の要望でご本人には内緒で入所の話が進められていることも多く、その際は特に心理的側面に配慮して受け入れを行うように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期面接の段階で聞き取りを行っている。多く挙がる不安な点として「通院介助に係ること」、「GHで対応が難しくなった場合のこと」がある。その場での説明で殆ど解決に至っているが、その後に発生する困りごとや不安なことも随時申し出て頂くように説明している。また、これまでに挙げた心配事を参考にしてあらかじめ説明するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	コロナ禍にあるが、入所をご希望されるご本人やご家族に限っては施設見学を受入れている。その際に施設利用について説明させて頂いているが、全ての入所希望者がグループホームに適しているものであった。今後、他のサービスも必要と考えられるケースにおいては法人内に多くのサービス提供事業所があることから案内を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当施設の特徴と言えるのだろうか？ 日中は殆どのご利用者がリビングで過ごされており、洗濯物の取り込みやたたみ物をはじめ多くの家事作業においてご利用者の役割となっている。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍により面会の制限を行っている。ご家族も理解されていることからオンラインでの面会や電話も殆どない状況にある。ご家族への情報発信ツールとして家族通信を用い、当月のご利用者の様子が伝わるよう取り組んでいる。また、サービス担当者会議でご家族からの要望は汲み取るように努めている。他にもご利用者の状態の変化などの際には電話での報告も行っている。	毎月、活動写真をふんだんに掲載した家族通信を発行しており、利用者個々の担当職員が利用者の最近の様子を直筆でコメントし、家族に送付している。6ヶ月に1回はサービス担当者会議で来訪していただけるようお願いしている。コロナ禍で面会に制限はあるが、年賀状や手紙、電話などで家族とのつながりが途切れないよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍により外出の制限をしていることから馴染みの場所を訪れることは難しくなっている。それでも、大切な方との関係性が保たれるように年賀状の送付は全てのご利用者が行っている。また、定期的に手紙のやり取りをされているご利用者もあり楽しみとなっている様子である。	馴染みの人との関係が途切れないよう、年賀状や手紙のやり取りを通じた交流を支援している。コロナ終息後に向けて今出来ることとして、利用者個々の情報収集に努め、今後の活動のために備えている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	全ての職員が全てのご利用者同士の関係性を理解している。そのことを考慮した上で職員も可能な限り利用者との会話の時間を持つように努めている。また、ご利用者のなかでも他のご利用者への配慮や心配をしてくださる方もあり、助かることも多くなっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後は併設される特養に転居される方が殆どであり、特養へ面会に訪れることでご利用者相互の喜びとなっていた。コロナ禍の現状ではそれも難しい状況となっている。契約終了の際には、今後も困りごとがあればお知らせいただくように案内している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	初期面接の段階で確認を行っている。施設入所後はアセスメントシートを用いてその時々が発せられる言動やご利用者同士での談笑の場面から汲み取れる思いや希望などを書面に落としている。それらの内容はケアプランへの反映や通常の介護支援の際に実現できるように全職員で情報の共有を図っている。	「センター方式」のアセスメントシートを活用し利用者の思いや意向の把握に努めている。利用者職員との関係が深く、何でも話し合える状態ができています。意思表示の難しい利用者には、利用者の担当職員および計画作成者が推察し代弁している。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	施設利用申込書に記載欄が設けられている。その情報を基に入所面接を行っている。入所に至る過程においては在宅福祉サービスをご利用されていた方が多く、ご本人・ご家族・サービス提供事業所から情報を収集している。これらの情報は全職員へ説明と伝達を行い、ご利用者がホームでの生活を直ぐに慣れるように取り組んでいる。	入居前の自宅訪問や施設訪問により利用者の生活環境の把握に努めている。生活歴から、調理師だった方には食事作りの場面で、手芸が得意だった方には衣類の修繕の場面、畑仕事が得意だった方には野菜作りの場面で活躍していただけるよう役割を持ってもらっている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	施設の広さと職員の配置を考えた際に全てのご利用者の様子を伺うことが可能と言える。毎日、その時々様子や気になる言動、体調面など記録に残しており、申し送りを行うことで全職員が把握できるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的なモニタリングの実施、六カ月に一回サービス担当者会議を実施している。サービス担当者会議ではご家族にも参加して頂いている。アセスメントの段階ではご本人への意向の確認の実施、介護スタッフへも協力を得て介護計画を作成している。	3ヶ月毎のモニタリングと6ヶ月に1回のケアプラン更新を基本としケアマネジメントを展開している。援助内容の評価は毎日実施し、月末に利用者の担当職員がまとめたコメントを記載している。「センサー方式」の書式によるアセスメントは全職員で取り組むことにより多くの情報が集約している。ケアプラン更新時にはサービス担当者会議として家族に來訪いただき、ケアの方向性の共有が行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画の作成、見直しに当たってはサービス実施状況表と介護記録を用いている。サービス提供の実践に於いてはご利用者のリアクションや意見を記載して職員間で情報の共有を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅へ戻って衣服の整理をしたいといったご利用者の声や例年であれば墓参りや外出をされていたご家族もあったが、現状の社会的な情勢のために自粛を余儀なくされている。ご希望があれば電話を使用してご利用者と会話をされるご家族もみられた。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍につき実施できず。 社会的な情勢次第で直ぐに対応できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所に伴い多くのご利用者が当施設の協力病院へ切り替えられている。入所前まではご家族で病院の介助を行っていた方も多く、ご家族の負担軽減に繋がっている。また、入所後もかかりつけ医を継続されている方もあり、希望に則した医療の提供に努めている。	母体である病院が協力医院のため、受診の利便性から全ての利用者がかかりつけを移行している。月2回の定期受診は職員が対応しており病院との連携はスムーズである。休日、夜間でも病院に連絡を取り、指示を仰いで対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置は無いものの、協力病院との連携は十分なものとなっている。日常で変化がみられた際は協力病院へ報告して指示を仰いだり、受診の指示を受けたりしている。365日24時間体制でのバックアップが受けられる環境はご家族の安心へと繋がっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	内科的な入院は協力病院となっている。ご家族の面会が困難な環境のなかでは職員からの情報が大切なものとなっている。また、入院時に必要な物品のお届けや洗濯物の回収、お届けなどご家族の負担が軽減されるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時の段階で看取り介護を行わないこと、重度化した場合は隣接する特養を案内させて頂くことを説明している。グループホーム退去後も受入先がはっきりしていることは、ご家族にとっても安心感へと繋がっている。また、ご家族が出来る限りグループホームでの生活を希望される場合は、話し合いのうえで対応している。	法人グループ内に病院、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、グループホームがあり、その時の状態に応じて適切な介護、医療を受けることができる。そのため、当事業所では看取りは行わない方針で利用者、家族に説明をしている。状態が変わった時には関係者で良く話し合いを行ない、可能な限り意向に添えるよう進めている。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	酸素ポンプの取扱いやCPR訓練などの研修の機会を毎年設けている。また、協力病院との連携がスムーズに行えるように事例を用いたケース検討も毎年行っている。現在では全ての職員が協力病院との対応が可能となっている。	事象別のマニュアルが整備されており、毎年5つほどの事例をもとに対応方法を考える研修も行なっている。研修参加が難しいパート職員には書面での内容を確認してもらっている。心肺蘇生法およびAED取扱い訓練、酸素ポンプの使用方法なども学び、有事に備えている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今年度は地区区長様の変更があったが、施設での有事の際における協力を依頼した。施設における防災訓練は消防署員からも来所していただいで実施している。指摘事項は議事録に残して全職員が徹底できるように努めている。防災器具や備蓄品についても定期的に点検している。	年に2回の総合防災訓練では火災想定をメインに、地震対応訓練なども行なっている。消防署に検証もお願いし、防災意識の向上に努めている。災害時には地区の連絡網に沿って区長に連絡を取り、消防団に協力を依頼できるシステムができています。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけにおいては、丁寧な言葉による対応よりもフランクな対応を好まれる方もいる。ご利用者各々の特性を見極めて失礼のないように取り組んでいる。また、ご利用者との長期に及ぶ生活のなかで、職員が慣れによる失礼がないように注意喚起を行っている。	個人情報保護、プライバシー、言葉遣いなどの研修を定期的に行ない、職員の資質向上に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎日の業務のなかで、ご利用者とお喋りしたりする時間が多く設けられている。職員とご利用者の関係も長くなっており、多くのご利用者が好きな事を言える環境にある。他の職員とご利用者の会話を客観的に聴く場面があるが、普段の会話のなかでご利用者の思いや希望を汲み取るような内容もみられている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	良くも悪くもご利用者が「施設とはこういったものだ」と認識されているところがあり、職員の提供するサービスに沿って生活が送られている。ただ、「前の施設ではテレビを観るか寝ただけだったから」といった話も多く、ご利用者にとって特段不満な様子もみられていない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	多くのご利用者がご自分で服を選んで着用されている。ご自分で更衣ができないご利用者には入浴の準備をする際に一緒に行くことで好きな服を選んで頂いている。また、起床時や入浴後は全てのご利用者に鏡の前でブラシを預けて整髪して頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	黙食を推奨することで、以前のような活気がみられる環境ではなくなった。それでも調理や準備、後片付けなどは以前と変わりなく実施できており、ご利用者各々の励みとなっている様子である。また、外出行事が実施できないことで調理レクの頻度を増やしている。普段、お手伝いが困難となっているご利用者も活躍の場となっている。	食事の場面で利用者が役割を持ってもらえるよう、準備、調理、後片付けとできることを手伝ってもらっている。職員も全員一緒に食事を摂っている。調理レクリエーションや行事食、セレクトメニューなど食事が楽しくなるような工夫も行なっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	カロリー制限の方や禁止される食材のある方、食事形態などご利用者一人ひとりにあった食事の提供に努めている。また、水分摂取を極端に嫌う方もあり、少量ずつ回数を多くして提供するなど工夫している。食事量の低下や体重の増減もチェックすることで変化が顕在化した際は主治医に相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後に自ら歯磨きに行かれる方や言葉掛けで促すことで歯磨きをされる方もあるが、いずれにせよ口腔清潔を保つ動作は自立されている方が殆どである。介助を必要とされる方は、口腔内を清潔に保つ為の介助が理解できなくなっていることで拒否がみられるが、清潔保持と誤嚥防止の上でしっかりと行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	汚染があった際は介護記録に残している。そうすることで排泄のパターンが把握できることに繋がっている。把握された排泄パターンを基に各々のトイレ誘導の時間を設定して汚染の軽減、及びトイレで排泄ができるように支援している。	排泄について、利用者の半数ほどはほぼ自立している。個々の排泄パターンは介護記録に記載し把握している。排便コントロールが上手いかない利用者には、こまめな定時誘導により快適な排泄が行えるよう対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量の確保や運動を取り入れることで自然排便を促すことは全職員が理解しているし実践もしている。ただ、高齢者にとっての排便困難は嘔吐や腸閉塞にも繋がる危険があり、主治医への相談のもとで下剤に頼っているご利用者が多くなっている現状である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ご利用者から入浴を希望される場面は皆無となっている。ただ、一番風呂を望まれる方や、熱めを好まれる方、長湯を好まれる方などご利用者各々の特徴は理解しており、それぞれに合った支援を行っている。	1日おき程度の間隔で入浴機会を提供している。利用者と職員が1対1で関わる場面として、会話を楽しみながら入浴介助が行われている。柚子湯や菖蒲湯などの変わり湯で季節を感じてもらうなど、快適に入浴が行えるよう考慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安眠や休息に関する支援は特段気にかけていない。休息を取りたいご利用者がいれば、ご自分で居室へ行かれており、夜間も全てのご利用者が安眠されている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員間で情報を共有するなかでご利用者に生じた変化を主治医に報告している。そこで処方される薬の目的は全職員が理解して然り、副作用や用法も受診介助職員から周知される。服用後の経過も追跡しており、連日申送りを徹底している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	お手伝いをお願いすることで意気に感じることによって張り合いや喜びは比較的訪れやすくなっている。しかし、「何もしたくない」と言うご利用者もいるなかで、穏やかな時間帯に於いて会話の時間を設けるなど工夫している。また、コロナ禍で外出の機会が保てないことでゴミ捨てや散歩など外気に触れる時間を取るようになっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍につき実施できず。 社会的な情勢次第で直ぐに対応できるようにしている。	コロナ禍により外出を制限しており、現状は、お花見ドライブと天気の良い日の屋外散歩程度しか行っていない状況である。コロナ禍以前は計画的な外出のほか、地域のお祭りやカフェに出掛けたり、個別の外出希望にも応えていた。	管理者としては、外出が少ないことによる利用者および職員のストレスも危惧している。外出時の車内での密な状況回避も感染予防には必要であるが、少人数でのドライブなど工夫をしながら、積極的に戸外に出かけていく取り組みを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍につきお金を使う機会がない。 施設内においてもお金を所持されているご利用者はいない。金銭管理は管理者が全て行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者全員が希望される方宛てに年賀状を送っている。なかには字を書くことに抵抗があるご利用者もあるが、元気であることを伝える目的やご家族の喜びとなるように協力を依頼している。また、少数ではあるが手紙を送ったり、電話を希望される方もいる。その際はご希望に沿うように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	上記の項目でも触れているが、字を書くことに抵抗があるご利用者があり、書道レクでの作品を掲示することが不満となっている。それ以外に関してご利用者からの不満や要望はない。ご利用者が余暇時間で作成したものを掲示することで、作品を観てご利用者同士で談話される場面をみかける。また、季節感のある飾り付けを行うことでご利用者に四季折々を感じて頂けるように努めている。	整理整頓されたフロアにはあえて余計な物は置かず、利用者の動線に配慮した家具の配置としており、転倒防止につながっている。利用者の書いた書道や季節ごとの貼り絵の作品などが壁に飾られ、目を楽しませてくれる。利用者は共用空間で過ごす時間が多いため、快適に過ごせるように湿度や温度にも配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間が狭く、何処に居ても視界に入る構造となっている。一人になりたい際は居室へ行かれるご利用者もあるが、多くの方が共用空間で大半の時間を共有している。職員が特段気に掛ける必要もなく、ご利用者同士で思い思いの時間を過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	良くも悪くも「ここは施設」と割り切っているご利用者が多く、必要最低限のものがあれば十分といった感じである。多くの方が一日の大半を共用部で過ごされることから居室は「寝る場所」といった感覚となっている。ご利用者にとって「居心地が良い」＝「皆で楽しく」となっている様子なので日中を如何に充実させるかが職員のモチベーションとなっている。	利用者の状態に応じて居室の変更を行なっている。家族と担当職員により居室作りが行われ、衣替えや模様替えも協力しながら行なっている。清掃の行き届いた清潔感のある居心地の良い居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	開設以来、環境が要因となるひやりはつとを基に都度安全な環境作りを推進してきた。最近では老人車の使用が多くなっていることから、配置場所やお互いの接触事故に注意している。また、居室やトイレの場所は分かりやすく表示するようにした。		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				